

行為としての批評

— De Profundis 論 —

鈴木英明

1895年5月25日、オールド・ベイリーにおいてアルフレッド・ウィルズ判事は、被告人オスカー・ワイルド（およびアルフレッド・テイラー）に対して次のように刑を宣告した。

It is the worst case I have ever tried. . . . And that you, Wilde, have been the centre of a circle of extensive corruption of the most hideous kind among young men, it is equally impossible to doubt. I shall, under such circumstances, be expected to pass the severest sentence that law allows. . . . The sentence of the Court is that each of you be imprisoned and kept to hard labour for two years. (Hyde 272)

刑の宣告は、J. L. Austin の言う行為遂行的発話 (performative utterance) である。行為遂行的発話についてオースティンはこう説明している。たとえば、仮に私が結婚式の宣誓において「誓います」と言うとき、あるいは船の進水式において「この船を『クイーン・エリザベス』と命名します」と言うとき、私は単に何かを言っているのではなく、何かを行っている。つまり、私が「誓います」、「命名します」と言うとき、その発話は「誓い」や「命名」という行為についての報告ではなく、私は実際にそうした行為を遂行しているのだ。「誓います」と言うとき、私は結婚式について報告、記述しているのではなく、結婚式を挙げている（遂行している）のである (Austin, *Philosophical Papers* 175-204)。したがって、行為遂行的発話は、発話の外部を参照することをつうじてその真偽を判別できない。たとえば、「彼は誓いました」という発話ならば、発話の外部にある事実（実際に彼が「誓った」のか否か）を示す証拠を参照することによってその真偽を判別しうる。しかし、「(私は) 誓います」という発話は真でも偽でもなく、その発話が向けられた相手もしくは周囲の状況に受け入れられるか否か（真偽ではなく成否）が問題となる。では、行為遂行的発話が成功する条件はどのようなものだろうか。それはまず、発話する者がそれにふさわしい権力・権威（ないしは資格）を有す

るということだろう。先に挙げた例で言えば、私が進水式の見物人にすぎないとき、私がシャンパンを手にして「この船を『クイーン・エリザベス』と命名します」と大声を張り上げて、その発話が失敗に終わることはほぼ確実だ。行為遂行的発話でまず問題になるのは、発話者とその相手もしくは周囲との力関係なのである。

言うまでもなく、判事による刑の宣告は、有無を言わせぬ法の圧倒的な力（あるいはベンヤミンの言う法維持的暴力）によって根拠づけられた、基本的には必ず成功する行為遂行的発話である。他方、刑の宣告を下された側であるワイルドも、出獄間際に自らの再生を賭けて或る行為遂行的発話を行っているが、これは、権力者の行為遂行的発話とは異なり、十分な根拠を持たず成功する保証もない発話だ。その行為遂行的発話とは、アルフレッド・ダグラスに宛てた手紙（*De Profundis*）の執筆のことである。汚辱に塗れたワイルドはその手紙において、投獄にいたるまでのダグラスとの交情を回想しながら、ダグラスを執拗に咎めると同時に、獄中での自らの経験、思考等をダグラスに説き、訴え、手紙の言葉から何事かを学ぶようにダグラスに要請している。したがって、*De Profundis*で語られた芸術論は、（ワイルドが将来におけるこの書簡の出版を前提していたとしても、第一義的には）ダグラスという宛先に向けられた、行為遂行性を強く帯びた批評なのだ。それは、真偽に関わる言葉というよりも、成否に関わる言明であり、宛名の人物に理解されることはおろか読まれることすら保証されない、賭けにも似た行為なのである。本稿では、*De Profundis*におけるこうした行為遂行性に注目し^①、投獄以前のワイルドの批評テキストとの関連に留意しながら、世紀末イギリスの獄中で認められたこの書簡の秘める批評性について考察したい。

I

De Profundis に対しては、1905年に出版された削除版から1949年に上梓された完本にいたるまで、相反する評価がなされてきた。近年では、たとえば Jonathan Dollimore は、*De Profundis* においてワイルドは「侵犯的美学」を放棄し、本質主義に基づく“Christian humility”へと撤退することを余儀なくされたと述べている（Dollimore 97）。他方で、Oliver Buckton はドリモアに反論しつつ、*De Profundis* は性的主体、自伝的主体の統一性、単一性に揺さ振りをかけており、後期ヴィクトリア朝における支配的な通念に対するワイルドの抵抗を示していると論じている（Buckton 176-77）。*De Profundis* に対して以上のように対立する評価がなされるのも無理はない。というのも、*De Profundis* には、それ以前に書かれたワイルドの

批評テキストとの断絶がはっきりと刻み込まれていると同時に、そこで論じられている中心的主題に或る種の連続性、一貫性が認められるからだ。この点で、*De Profundis* におけるワイルドの変身ぶりと一貫性を同時に指摘する Terry Eagleton は的を射ている（Eagleton 335-41）。しかし、これから見るように、*De Profundis* に関して私が論じようとする連続性と非連続性は、イーグルトンの論評とは異なる意味においてある。

ワイルドの投獄以前の批評テキストから *De Profundis* への見かけ上の移行は、時代錯誤的な言葉で要約すれば、いわゆるポストモダンな言説からモダンな言説への移行と言えるだろう。すなわち、主体の複数性、流動的アイデンティティ、“pleasure”や“mask”といった言葉に反映される「浅さ」から、主体の単一性、固定的アイデンティティ、“sorrow”、“suffering”、“pain”といった言葉が含意する「深さ」への移行である。この移行、変化は、たとえば次のような事例に明確に示されている。“The Soul of Man under Socialism”（1891）では、痛みへの共感に基づくキリスト教に対して、“pleasure”や“joy”への共感に基づく真の個人主義、すなわち“new Hellenism”の優位が説かれていた。これに対して、*De Profundis* においては、自らをもって「悲哀の人」（the Man of Sorrows）のイメージを作り上げたキリストこそが最高の個人主義者とされているのである。実際、ワイルド自身 *De Profundis* において、“They [sorrow and suffering] had no place in my philosophy”（CL 736）^②と語っている。

こうした変化とは逆に、*De Profundis* とそれ以前の批評テキストとを一貫する中心的主題を認めることもできる。それは、内部と外部、内容と形式、魂と身体、精神と感覚といった、対立する二つの項の統一への欲望、対立するもの的一致への欲望という主題、すなわちロマン主義的全体化という主題である。たとえば、“The Critic as Artist”（1890）においてギルバートは、芸術的、批評的気質を満足させるのは形式（form）と精神（spirit）とのコレスポンドのみであると語る（CW 1038）。これと同様に *De Profundis* においても、“Truth in Art is the unity of a thing with itself: the outward rendered expressive of the inward: the soul made incarnate: the body instinct with spirit”（CL 737）。と書かれ、芸術家が追い求める真理とは、外面が内面を表現し、“soul”が“body”と統一される状態であると論じられる。しかし、こうした統一、全体化は最終的には不可能であることが、すでに *The Picture of Dorian Gray*（1891）の物語世界において示されていた。ドリアンは「感覚を精神化すること」を目指しながらも、その画像と身体とは最後まで一致することはなかったのだから。したがって、対立物の統一という主題には、その不可能性

(すなわち乖離や分裂という主題)が始めから含まれていると見るべきなのだ(鈴木「プロトプラズムの「魂」」6)。

ワイルドは *De Profundis* において次のように書いている。“What the paradox was to me in the sphere of thought, perversity became to me in the sphere of passion” (CL 730). 対立物の統一／分裂という“paradox”(ワイルドのテキストに一貫する主題)は、レトリックの「領域」では、ワイルドがしばしば用いる交差対句法(chiasmus)に修辭的に体现されていると言えるだろう。たとえば、*The Picture of Dorian Gray* において、ドリアンはヘンリー卿から教えられた、交差対句法を用いた次のフレーズを繰り返す口にする。“To cure the soul by means of the senses, and the senses by means of the soul” (CW 140) 感覚によって魂を癒し、魂によって感覚を癒すことで、感覚と魂の統一が目指されている。しかし、両者は“and”という等位接続詞をはさんで、鏡像のように左右が反転した状態で等置され、各々別の事態として独立・分裂しているとも考えられるのだ。交差対句法が用いられた別の例として、*De Profundis* に次のような一文がある。“I was so typical a child of my age that in my perversity, and for that perversity's sake, I turned the good things of my life to evil, and the evil things of my life to good” (CL 732-33, 強調は引用者)。ここでは、通常の善と悪の区別が消され、結果として両者が統一されているとも考えられるが、これと同時に、善と悪とは反転しただけで、両者は分裂したままであるとも言えるのだ。同じく *De Profundis* における、“I made art a philosophy, and philosophy an art” (CL 729) という一文についても同様である。

De Profundis において特徴的なことは、対立物の統一／分裂という主題(パラドクス)が、交差対句法としてのみならず、それ以上に明確に、書簡全体の構造として次の二つのレベルで体现されているという点である。第一のレベルは、テキストにおけるリアリズムの部分と芸術論的部分との分裂的並存である。*De Profundis* において、自らの人生(行為)を審美化・芸術化したキリストがロマン主義運動の先駆者として称えられていることと平行して、ワイルド自身も、ダグラスとの過去を写實的に回想しながら、そこに芸術論・キリスト論を混在させることで、獄中での苦悩と悲嘆の日々に耐える自分をキリストと同様に審美化し、キリストに一致させようとしている⁹⁾。しかし言うまでもなく、独房で書簡を綴るワイルドと神話化されたキリストとのあいだには越えがたい無限の距離がある。第二のレベルは、発話内容の主体(つまり、*De Profundis* というテキストにおける主語“I”)の水準における、苦悩する現在の自己と、快楽に耽る過去の自己(あるいは過去の自己と共犯関係にあるダグラス)との分裂的並存である。

バックトンが明快に論じているように、*De Profundis* は、その登場人物を、現在の自己と過去の自己(あるいはワイルドと鏡像関係にあるダグラス)という二つの項に分裂させることによって自伝的主体の虚構的統一性を揺るがすと同時に、この二項が切っても切れない相互依存的な関係にあることを示すことで、両者の統一、和解を目指しているということだ。

しかし、手紙の中の現在の自己とも過去の自己とも異なる水準にある主体、つまり、ダグラスに宛てて手紙を書いているワイルドという発話行為の主体を、バックトンは考慮に入れていない。ダグラスとの過去を追想しながら獄中での悲哀を書き綴るワイルドは、過去の自己(=ダグラス)と現在の自己という、分裂的に並存する二つの自己のはざまに立ち、両者を媒介しているとも考えられるのだ。こうした発話行為の主体のステイタスを理解するには、『ドリアン・グレイの肖像』における一場面を想起するとよい。それは、ドリアンが肖像画と手鏡に映る自分の顔とを見比べる場面だ。このとき、画像と鏡像とを見比べるドリアンは、分裂的に並存する二つの自己の間に立ち、その両者と異なる水準にある行為主体として両者を媒介していたのである。そして、以上のような発話行為の主体のステイタスは、比喩的に言えば、統一／分裂という主題を修辭的に体现する交差対句法における接続詞のステイタスに等しい。こうして、独房で手紙を綴るワイルドを、交差対句法における左右の項を結ぶ接続詞、左右の項の接点と平行関係にあるものとして考えることが可能となる。

ここで注目すべきは、投獄以前の批評テキストと *De Profundis* に共通して使用されている“brain”という語である。なぜならば、この“brain”という語を、内部／外部、“soul”／“body”といった対立する二項の接点の隠喩、あるいは、交差対句法における接点の隠喩とみなすことができるように思えるからだ。これを証明するには、後期ヴィクトリア朝における心理学と批評との関係、さらには当時の心理学において優勢であった学説を見ておく必要がある。

II

Ian Small はおおよそ次のような意味のことを述べている。19世紀中頃から、文学批評はしだいに専門化・制度化されてアカデミックな言説となり、そうした文学批評の知的権威を支えたのは、すでに学問分野として確立されていた歴史学であった。他方、そうした制度化の外に追いやられた批評家、あるいは制度の内部で周縁化されていった文学者は、自らの知的権威を個人(individual)の中に求めると同時に、その学問的権威として、個人の感覚・印象(sense-impression)を研

究対象とする心理学を拠り所とするようになった。こうした流れの中から、ベーターの批評やワイルドの個人主義が出てきたというのである。では、その当時の心理学の正統的な学説はどのようなものだったのだろうか。Edward Reedによれば、解剖学や生理学の知見を取り入れた、魂を脳に位置づける「大脳中心主義」が19世紀を通じて支配的であった(Reed 1-21)。この「大脳中心主義」は、一見唯物論的に見えるが、心の位置を人間の脳という特別な場所に限定し、人間と他の生物とははっきりと区別するという点において、実はリベラルなキリスト教神学の考え方に沿うものだった。そして、19世紀後半には、チャールズ・ダーウインの友人でもあったトマス・ヘンリー・ハックスリらが唱えた二重側面説(dual aspect theory)が有力になったとリードは述べる。この二重側面説とは、心的なものとの物的なものは、脳という一つのものの二つの側面であるという説で、スピノザの一元論を生理学的に解釈し直したような理論である。この説はたとえば、1874年に行われたハックスリの講演の一節に読み取れる。“The nervous system [the brain] stands between consciousness and the assumed external world, as an interpreter who can talk with his fingers stands between a hidden speaker and a man who is stone deaf” (Huxley 211)。また、ジョン・スチュアート・ミルが高く評価する心理学者アレクザンダー・ベインは、まさしく *Mind and Body* (1873) と題された著書の結論部において、物的なものとの心的なものは、二つの顔を持つひとつの統一体(a double faced unity)であると述べている(Bain 196)。

興味深いことに、このような心と物質、魂と身体との関係をめぐる科学的、哲学的問題、いわゆる心身問題にワイルドが極めて高い関心を持っていたということが、その大学生時代のノートブックからわかる。それは、たとえば次のような部分である。“While psychology rests on the physiology of the *nervous system*[,] the popular notion of mind is that it is a metaphysical entity seated in the head like a telegraph operator--modern science contends it is a function of the *brain*” (*Oxford Notebooks* 164, 強調は引用者)。また、ノートブックの別の箇所では、おおよそ以下のようなことが記されている。「意識を研究する科学では、心の活動は生理的な活動と同様生きた細胞の特性であり、心と生理とが切り離せないことを示す概念として、“cell-soul”なるものが考え出された。人間の脳細胞(cerebral cells of the human brain)は、意識が発生する器官である」(*Oxford Notebooks* 111-12)。これと類似した内容のメモがノートブックに散見されることから、ワイルドが心身問題や“brain”をめぐる二重側面説に通じていたことは明らかである。

大学卒業後のワイルドの著述における“brain”という語の使い方にも、この二重

側面説の影響が見て取れる。たとえば、“The Critic as Artist”にはこう書かれている。

People sometimes say that fiction is getting too morbid. As far as psychology is concerned, it has never been morbid enough. We have merely touched the surface of the *soul*, that is all. In one single ivory *cell of the brain* there are stored away things more marvellous and more terrible than even they have dreamed of. . . . (CW 1055, 強調は引用者)

また、“The Decay of Lying” (1889) には次のような一節がある。

Nature is no great mother who has borne us. She is our creation. It is in our *brain* that she quickens to life. *Things are because we see them*, and what we see, and how we see it, depends on the Arts that have influenced us. (CW 986, 強調は引用者)

上の二つの引用部分で、脳は生命が活気づけられる場所、あるいは魂と結びついた場所であると述べられている。特に“The Decay of Lying”から引いた一節においては、自然界の事物は脳と結びつくからこそ存在するとまで主張されているのだ。そしてさらに、*De Profundis* においても同様のことが語られている。

I said in *Dorian Gray* that the great sins of the world take place in *the brain*: but it is in *the brain* that everything takes place. We know now that we do not see with the eyes or hear with the ears. They are merely channels for the transmission, adequate or inadequate, of *sense-impressions*. It is in *the brain* that the poppy is red, that the apple is odorous, that the skylark sings. (CL 748, 強調は引用者)

すべてが脳の中で起こるということは、つまり、物質と精神は脳から派生する二つの現象だということであり、逆に言えば、脳は物質と精神との接点であるということだ。このように見えてくると、ワイルドのテキストにおいて“brain”という語は、精神/物質、“soul”/“body”といった対立する二項の接点であり、対立物の統一/分裂という主題を修辭的に体現する交差対句法の接続詞の隠喩になっていると解釈できる。

ところで、先ほど述べたように、独房で手紙を綴るワイルド、つまり発話行為の主体としてのワイルドは、交差対句法における左右の項を結ぶ接続詞、左右の項の接点と平行関係にあった。ということは、これまで見たような意味を付与された“brain”という語と、独房における発話主体としてのワイルドとを重ね合わせるという読みが可能となる。ここで注目すべき点は、*De Profundis*において、意味の換喩的な連関によって、脳 (brain) が独房 (cell) という意味を帯びるようになってきているということだ。“brain”という単語が閉じられた空間的表象と結びつく傾向があるということは、投獄以前のテキストと *De Profundis* とで共通している。この点を、*The Picture of Dorian Gray* と *De Profundis* からの引用で確認しておきたい。“[T]hrough the chambers of the brain sweep phantoms more terrible than reality itself” (CW 104, 強調は引用者)。“[T] here is nothing that happened in those ill-starred years that I cannot recreate in that chamber of the brain which is set apart for grief or for despair” (CL 706, 強調は引用者)。そして注目すべきは、*De Profundis* において、「独房」という意味で繰り返し使用される“cell”という単語が、次のように比喩的に用いられている箇所があるということだ。

[H]ow slowly time goes with us who lie in prison I need not speak again, nor of the weariness and despair that creep back into one's cell, and into the cell of one's heart. . . . (CL 739, 強調は引用者)

この一節における“the cell of one's heart”というフレーズは、「心という独房」という意味にとるのが通常の解釈だろう。しかし、もちろん“heart”を「心臓」という意味にとることもできる。そう考えると、心臓 (heart) という、脳 (brain) と隣接関係にある身体内部の器官を表す語を媒介として、“brain”という語と「独房」を意味する“cell”という語が換喩的に連結されることになる⁽⁴⁾。そして、これまで引用した部分から明らかなように、もともとワイルドのテキストにおいては、「細胞」を意味する“cell”という語は“brain”と親和性の高いものだった。このことを考え合わせると、*De Profundis* においては、“brain”という語が、まさにこの“brain”という文字が綴られている現場である「独房 (cell)」という空間的表象に結びつけられていると言えるのである。

III

ワイルドが快樂を追い求めるダンディから、悲しみに沈むまじめで深みのある

人間へと変貌した (この変貌を、成長ととるか後退ととるかは別として)、とにかくそうした変貌を *De Profundis* は示している、そう考えることもできる。しかし、そうした論評は、ワイルドが投獄される以前のテキストで「まじめ」と「ふまじめ」という二項対立が無効にされている以上、本質的なことではないだろう。バーナード・ショーが1905年版の *De Profundis* を“no real tragedy, all comedy”と評した所以である (Beckson 244)。しかし他方で、*De Profundis* は投獄以前のテキストの延長線上にあるとし、両者の連続性を強調する主張も、或る重要な点を見逃している。それは、投獄以前と以後とを一貫する、対立物の統一/分裂という主題 (パラドクス) を表す“brain”という語が *De Profundis* において、ワイルドが手紙を書いている場所である独房 (cell) と結びつき、「独房で手紙を書く」という行為遂行性そのものが、*De Profundis* というテキストの中で自己言及的に示唆されるようになった、という点である。

こうして、自己言及的に喚起された「独房で手紙を書く」という現場性、遂行性を *De Profundis* からあぶり出すことによって、ワイルドがレディング監獄の独房で手紙を書くことの意味が改めて問われることになる。この点に関して、Regenia Gagnier は次のような意味のことを述べている。ワイルドが長文の自伝的書簡を書いたのは、書簡においてワイルド個人のスタイルを貫き想像力を駆使することによって、監獄制度が強制する沈黙と孤立化、規格化 (regimentation) の時空間に抵抗するためであったと (Gagnier 186)。しかし、ワイルドがそうした意味で抵抗しきれているとは言いがたい。なぜならば、先に確認したように、*De Profundis* においてワイルドのスタイルは大きく変容し、ドリモアが指摘するような変化 (規律-訓練の権力による矯正・馴化の効果) がテキストに刻印されているからである。それは否定しえない。では、*De Profundis* における抵抗とは何か。

それは第一に、交差対句法の左右の項のはざまという決して変化しない空-間として、ワイルドという発話行為の主体を修辭的にテキスト内に組み入れたことである。発話行為の主体は対象化されえず、表象されることもありえない。たとえば、私が「わたしは……である」と発話した瞬間、発話した私 (行為主体) は発話内容の主語である「わたし」に回収しきれない或る剰余、ずれ、空虚として、表象されないまま言語の外部に残される。既存の象徴秩序 (文化等の様々なイデオロギー) に参入・従属し、その秩序において自分のアイデンティティを与えられ「わたしは……である」と発話することが主体化だとすれば、発話行為の主体とは、そうした主体化のプロセスが副産物として産み出してしまう、対象化されない剰余であり表象しえない空虚なのだ⁽⁵⁾。それはつまり、権力による支配そ

のものがはからずも産み出してしまう、権力の内部における権力の外部であり、権力による全体化を阻む抵抗の空-間なのである。*De Profundis*における脳 (brain) = 独房 (cell) は、そしてそれらの語が喚起するかぎりでの、「ワイルド」という固有名で呼ばれる発話行為の主体は、そうした抵抗の空-間を体現しているのだ。

それだけではない。テキストに組み入れられた、権力による全体化を阻む表象不可能な抵抗の空-間を、ラヴ・レターという遂行的発話の形式によって宛名の人物に「転移」させ⁶⁾、抵抗を継続することが目指されている。ワイルドは、出獄を目前に控えた1897年4月1日付ロバート・ロス宛の書簡で、次のように書いている。

Of course from one point of view I know that on the day of my release I shall be merely passing from one prison into another, and there are times when the whole world seems to me no larger than my cell, and as full of terror for me. (CL 781)

だからこそ、抵抗は継続されねばならないのであり、*De Profundis*の言葉は、手紙の終わりに近づくにつれていっそう要請、説得の色を濃くしている。そうした言葉を一部列挙してみよう。“You must remember . . .” (CL 770). “Sit down quietly and consider it” (CL 775). “[P]ray do not forget . . .” (CL 776). “You must look back . . .” (CL 776). “Write to me . . .” (CL 779). “Tell me . . .” (CL 779). “Do not be afraid . . .” (CL 779). このようにワイルドは、芸術論も含めて手紙で自分が述べたことを受け入れ理解しようダグラスに要請している。それは同時に、ダグラスに対する変わらぬ“Love”を伝え、ダグラスをあらためて誘惑することでもあるだろう。ワイルドは *De Profundis* を次の言葉で結んでいる。“You came to me to learn the Pleasure of Life and the Pleasure of Art. Perhaps I am chosen to teach you something much more wonderful, the meaning of Sorrow, and its beauty” (CL 780). この言葉の賭け金は、真理ではなく、ダグラスがこれに同意するということであり、それはこのラヴ・レター全体について言える⁷⁾。つまり、*De Profundis* は、その中心に芸術論やキリスト論を含みながらも、真偽よりも事の成否 (ダグラスの愛を取り戻せるか否か) を問題とする、行為遂行的な発話の記録であるということだ⁸⁾。だがこれは、究極的には、匿名的な読者に向けられた批評一般についても妥当することではないだろうか。批評は、真理を (語っていると) 言明しながら、その言明を受け入れるよう読者に要請する誘惑的な発話行為でもあるからだ。この意味で、世紀末イ

ギリスの獄中でワイルドによって綴られた「(同性) 愛の手紙」は、批評すなわち真理を目指す言葉の裏側に秘められた、成否の不明な危うい行為遂行性をあらわにしているのである。

(本稿は、日本英文学会第73回大会〔2001年5月20日、学習院大学にて開催〕において口頭発表された原稿を大幅に改稿したものである。)

注

- (1) Shoshana Felman は、文学テキスト (モリエールの『ドン・ジュアン』) とオースティンの言語行為論との絡み合いを先駆的に論じている。「約束」という行為遂行的発話の分析をつうじて言語哲学の“erotics”を暴き、さらには、歴史が同化しえない「スキャンダラスな」“radical negativity”こそが出来事としての歴史を作ると述べるフェルマンの議論の重要性は、ここであらためて強調しておきたい。
- (2) *De Profundis* を含むワイルドの書簡からの引用は *The Complete Letters* に拠り、これを CL と略記する。また、書簡以外のワイルドのテキストからの引用は (*Oscar Wilde's Oxford Notebooks* から引用する場合を除いて) *The Complete Works of Oscar Wilde* に拠り、これを CW と略記する。
- (3) 「同性愛行為」によって刑に服することになったワイルドが、キリストを審美化し自分の姿に重ねようとすればするほど、それによってキリストはクイア化されることになる。それは同時に、キリストを、世紀末イギリスの監獄という権力空間に召喚し、その暴力に曝すことに他ならない。つまり、ワイルドによるキリストの審美化はその政治化と同義なのだ。
- (4) *De Profundis* における“heart”と“brain”の隣接性を示す別の例として、“Lord Christ's heart and Shakespeare's brain” (CL 741) というフレーズがある。
- (5) こうしたイデオロギー的主体化によって各人に与えられたアイデンティティを、各人は真正なる自己として対象的に捉えることになる。「自己」とは、経験的なレヴェルで対象化されて存在するイメージ (表象) だが、これに対して (発話行為の) 主体は、「超越論的主体」(カント) でありイメージ化されえない。この意味で、*De Profundis* における、「苦悩によってその連続性を保証されるアイデンティティ」(CL 696) やワイルドの悲哀に沈んだ姿は、これと対照的な投獄以前の姿と同様、イデオロギー的に操作可能な自己イメージ (仮面) であり、イメージ化できない空-間としての主体ではない。*De Profundis* は、そうした主体を表象しているのではなく、それを修辭的にテキスト内に組み込んでいるのである。
- (6) 「転移 (transference)」は、ワイルド自身が“*The Critic as Artist*”の次の一文で使用している語である。“It is a strange thing, this transference of emotion” (CW 1038).

- (7) Richard Ellmann は、*De Profundis* は構成的には混乱しているがラヴ・レターとしては一貫性を備えており、これまで書かれた中でも最高の手紙として評価すべきだと述べている(Ellmann 484)。
- (8) ワイルドの批評テキストはもともと行為遂行性を強く帯びている。プラトンの対話体で書かれた“The Decay of Lying”や“The Critic as Artist”、それに何よりも、手紙を媒体として「ウィリー・ヒューズ説」の転移が生じる *The Portrait of Mr. W. H.* を想起すればそれは明らかだ(鈴木、「穴としての肖像画」)。*De Profundis* においては、こうした傾向が極限にまで押し進められている。

参考文献

- Austin, J. L. *How to Do Things with Words*. Eds. J. O. Urmson and Marina Sbisa. 2nd ed. Cambridge: Harvard UP, 1962.
- . *Philosophical Papers*. Eds. J. O. Urmson and G. J. Warnock. 3rd ed. Oxford: Oxford UP, 1979. [J. L. オースティン 『オースティン哲学論文集』坂本百大監訳、勁草書房、1991年.]
- Bain, Alexander. *Mind and Body: The Theories of Their Relation*. 1873. London: Kegan Paul, 1892.
- Beckson, Karl, ed. *Oscar Wilde: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1970.
- ベンヤミン、ヴァルター『暴力批判論』野村修訳、岩波文庫、1994年。
- バンヴェニスト、エミール『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳、みすず書房、1983年。
- Buckton, Oliver. “‘Desire Without Limit’: Dissident Confession in Oscar Wilde’s *De Profundis*.” *Victorian Sexual Dissidence*. Ed. Richard Dellamora. Chicago: U of Chicago P, 1999.
- Cohen, Ed. *Talk on the Wilde Side: Toward a Genealogy of a Discourse on Male Sexualities*. New York: Routledge, 1993.
- De Man, Paul. *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Dollimore, Jonathan. *Sexual Dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1995. [テリー・イーグルトン 『表象のアイルランド』鈴木聡訳、紀伊国屋書店、1997年.]
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Penguin, 1988.
- Felman, Shoshana. *The Scandal of the Speaking Body: Don Juan with J. L. Austin or Seduction in Two Languages*. Trans. Catherine Porter. Stanford: Stanford UP, 2003. Trans. of *Le Scandale du corps parlant: Don Juan avec Austin, ou, la seduction en deux langues*. Paris: Seuil, 1980. [ショシャナ・フェルマン 『語る身体のスキャンダル』立川健二訳、勁草書房、1991年.]
- Fineman, Joel. *The Subjectivity Effect in Western Literary Tradition: Essays Toward the Release*

- of Shakespeare’s Will*. Cambridge: MIT Press, 1991.
- 富士川義之『英国の世紀末』新書館、1999年。
- Gagnier, Regenia. *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public*. Stanford: Stanford UP, 1986.
- Huxley, Thomas Henry. “On the Hypothesis That Animals Are Automata, and Its History.” *Method and Results*. London: Macmillan, 1893.
- Hyde, H. Montgomery. *The Trials of Oscar Wilde*. New York: Dover, 1973.
- カント、イマヌエル『純粹理性批判』岩波文庫、1961年
- 河内恵子『深淵の旅人たち』慶應義塾大学出版会、2004年。
- Reed, Edward S. *From Soul to Mind: The Emergence of Psychology, from Erasmus Darwin to William James*. New Haven: Yale UP, 1997. [エドワード・リード『魂から心へ—心理学の誕生』村田純一他訳、青土社、2000年.]
- Small, Ian. *Conditions for Criticism: Authority, Knowledge, and Literature in the Late Nineteenth Century*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- 鈴木英明『穴としての肖像画—*The Portrait of Mr. W. H.* における表象の政治学』『山脇学園短期大学紀要』第37号(1999): 97-107.
- . 「プロトプラズムの「魂」』『オスカー・ワイルド研究』第5号(2003): 1-11.
- Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde*. New York: Harper and Row, 1989.
- . *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. New York, 2000.
- . *Oscar Wilde’s Oxford Notebooks: A Portrait of a Mind in the Making*. Eds. Philip E. Smith and Michael S. Helfand. New York: Oxford UP, 1989.